





昭和二十年十一月廿一日

蟲干しから

女性の男性化を排す

(下) 竹内余所次郎

吾輩は人生と戦闘であると承認する。此世は一而真に叫喚の地獄、阿鼻であると云ふことを否認せぬ。併しながら夫れだけ云つて、此世に美しき花の緑の帷、白妙の幕で蔽ふ好景色のあるのを妨げぬ。否な地獄があればこそ、一方に此の樂園天堂を要するのである。

宇宙は恐ろしい、人生は寂しい。裸で生れ、何一つ持たずして死んで行く、生れる時も遺連れなく、死ぬ時も一人ボッヂである。千里孤獨の一人旅、朝に憂あり、夕に悲れあり、戦鬪籠争の脅威、四時を絶たず。唯其處に男に對する女ありて、此の恐怖しさ、寂しさを調和して居るのである、男性と女性の間に愛の繩縄の繋がるあり、彼れ打てば此れ響く。男の雄偉剛壯も女よりも見れば、美であり、愛すべきものである。女性の柔婉優麗は固より男性の生命を賭して執着せんとする所のものである。

女性よ、他くまでも美しくあれど、女性よ、其の心理美を失ふ勿れ。男性と女性は其の身體に於て心も靈に於ても、永久の道連れである、永久の女性よ、其の心理美を失ふ勿れ。男女相結んで子孫々に永久に世界の主人として、他の萬物に擢んでである、必ずしも彼に學ばねばならぬこと、女性の美は人體結合の紐繩である。女性の肉体美、心理美は啻に之を失ふてならぬばかりでない彼に學ぶを要せぬ、否な寧ろ

く、愈々益々發達させねばならぬ。

人生に美ありて始めて住むに堪へるのである、若しも人生が如何に寛闊なる所ぞよ、ダイヤ

算盤をはじくばかりの處ならば、思はざる其の美しいものであ

打たれて恍惚なる能はず、唯其の幾千幾萬の價値のみを算する人の始何に俗なるかを見よ、應

入探幽の畫の前に座する時、畫

と已れと全く別物なるを忘れ陶然醉へるが如く、其畫中に溶け我れに來りしか、我れ畫に往

しがの分別し難き境地に入りて

は、

誤り、今正に其の弊を受けつゝ

なやりづばな仕事は、やがて

あるを見る、東洋人が深く考へ

すして、何でも彼に學ぶが如き

に眩したる目を以て、其の弊事

をも美事善事と見るの誤りに陥るなかれ。

ふ、歐米人は女性に對する道を

た何んでも關はないと云ふやう

な高遠な理想をも全

ては如何なる

溺死させてしまうに相違ありません。凡てのものは皆要するに、その人、それ自身の心の問題なのです。凡てのものは皆に躊躇して云ひ現はす。その反射行為をその心の中に齋らすには一つとして云ひ現はす。

事も實行する事も、又考へる事

は、思はざる其の美しいものであ

は、

&lt;p



## 大使一行消息

レデストロを終へ

ノロエーステ線へ  
去十三日サントスを出發した有

吉大使一行はジユキヤ線各驛に

於て邦人の歓迎を受け大使夫人

は驛毎に邦人兒童にお土産の菓子を與へたバラダ、セードロ驛

では驛前的小學校内に設けられ

了歓迎會場に赴き校庭で記念撮影をなし、かくて午後一時半、

ジユキヤ驛着、レジストロより

出迎ひの白鳥氏の案内で一行は

海興ランチでリベイラ河を下り

夕刻レジストロ植民地着、十四

十五兩日植民地内を視察し十六

日夜聖市へ歸着、十八日ルス驛

はバウルー市長市會議長及び全

事官邸に赴いた、十九日はバウ

ルー市内を見物し午後一時五分

リヌスに向つた途中チビリサ、

ラクル・ミユーレ、グフラン

タ・ペナ等に於て在留同

胞より盛んなる歓迎をうけ全午

後六時リヌス着、市長郡長其他

土地有志及び在住同胞約三百名

の出迎をうけセントラルホテル

に入つたが此光景は其感動活動寫

眞に撮られた、全夜は市長より

晚餐の饗應をうけ互に歓談書き

ざらしめた(福岡特派員發)

同志會改稱 有吉大使の來

聖を機さして聖市のある一部邦人間には日本人會設立の議が起

りコクメイに奔走してゐる模様

なるが、同志會では逸早くこ

に眼をつけ日本人會設立の下準

備として同志會改めサンバウ

日本人會と稱することに決定しきるも約二万五千名に達するたこれには赤松總領事よりの懇

トクなお聲掛りもあり目下準備

は着々進行中となるが同

志會の延長に相違なき點は別項

去十三日サントスを出發した有

吉大使一行はジユキヤ線各驛に

於て邦人の歓迎を受け大使夫人

は驛毎に邦人兒童にお土産の菓子を與へたバラダ、セードロ驛

では驛前的小學校内に設けられ

了歓迎會場に赴き校庭で記念撮影をなし、かくて午後一時半、

ジユキヤ驛着、レジストロより

出迎ひの白鳥氏の案内で一行は

海興ランチでリベイラ河を下り

夕刻レジストロ植民地着、十四

十五兩日植民地内を視察し十六

日夜聖市へ歸着、十八日ルス驛

はバウルー市長市會議長及び全

事官邸に赴いた、十九日はバウ

ルー市内を見物し午後一時五分

リヌスに向つた途中チビリサ、

ラクル・ミユーレ、グフラン

タ・ペナ等に於て在留同

胞より盛んなる歓迎をうけ全午

後六時リヌス着、市長郡長其他

土地有志及び在住同胞約三百名

の出迎をうけセントラルホテル

に入つたが此光景は其感動活動寫

眞に撮られた、全夜は市長より

晚餐の饗應をうけ互に歓談書き

ざらしめた(福岡特派員發)

同志會改稱 有吉大使の來

聖を機さして聖市のある一部邦人間には日本人會設立の議が起

りコクメイに奔走してゐる模様

日本人會と稱することに決定しきるも約二万五千名に達するたこれには赤松總領事よりの懇

トクなお聲掛りもあり目下準備

は着々進行中となるが同

志會の延長に相違なき點は別項

去十三日サントスを出發した有

吉大使一行はジユキヤ線各驛に

於て邦人の歓迎を受け大使夫人

は驛毎に邦人兒童にお土産の菓子を與へたバラダ、セードロ驛

では驛前的小學校内に設けられ

了歓迎會場に赴き校庭で記念撮影をなし、かくて午後一時半、

ジユキヤ驛着、レジストロより

出迎ひの白鳥氏の案内で一行は

海興ランチでリベイラ河を下り

夕刻レジストロ植民地着、十四

十五兩日植民地内を視察し十六

日夜聖市へ歸着、十八日ルス驛

はバウルー市長市會議長及び全

事官邸に赴いた、十九日はバウ

ルー市内を見物し午後一時五分

リヌスに向つた途中チビリサ、

ラクル・ミユーレ、グフラン

タ・ペナ等に於て在留同

胞より盛んなる歓迎をうけ全午

後六時リヌス着、市長郡長其他

土地有志及び在住同胞約三百名

の出迎をうけセントラルホテル

に入つたが此光景は其感動活動寫

眞に撮られた、全夜は市長より

晚餐の饗應をうけ互に歓談書き

ざらしめた(福岡特派員發)

日本人會と稱することに決定しきるも約二万五千名に達するたこれには赤松總領事よりの懇

トクなお聲掛りもあり目下準備

は着々進行中となるが同

志會の延長に相違なき點は別項

去十三日サントスを出發した有

吉大使一行はジユキヤ線各驛に

於て邦人の歓迎を受け大使夫人

は驛毎に邦人兒童にお土産の菓子を與へたバラダ、セードロ驛

では驛前的小學校内に設けられ

了歓迎會場に赴き校庭で記念撮影をなし、かくて午後一時半、

ジユキヤ驛着、レジストロより

出迎ひの白鳥氏の案内で一行は

海興ランチでリベイラ河を下り

夕刻レジストロ植民地着、十四

十五兩日植民地内を視察し十六

日夜聖市へ歸着、十八日ルス驛

はバウルー市長市會議長及び全

事官邸に赴いた、十九日はバウ

ルー市内を見物し午後一時五分

リヌスに向つた途中チビリサ、

ラクル・ミユーレ、グフラン

タ・ペナ等に於て在留同

胞より盛んなる歓迎をうけ全午

後六時リヌス着、市長郡長其他

土地有志及び在住同胞約三百名

の出迎をうけセントラルホテル

に入つたが此光景は其感動活動寫

眞に撮られた、全夜は市長より

晚餐の饗應をうけ互に歓談書き

ざらしめた(福岡特派員發)

日本人會と稱することに決定しきるも約二万五千名に達するたこれには赤松總領事よりの懇

トクなお聲掛りもあり目下準備

は着々進行中となるが同

志會の延長に相違なき點は別項

去十三日サントスを出發した有

吉大使一行はジユキヤ線各驛に

於て邦人の歓迎を受け大使夫人

は驛毎に邦人兒童にお土産の菓子を與へたバラダ、セードロ驛

では驛前的小學校内に設けられ

了歓迎會場に赴き校庭で記念撮影をなし、かくて午後一時半、

ジユキヤ驛着、レジストロより

出迎ひの白鳥氏の案内で一行は

海興ランチでリベイラ河を下り

夕刻レジストロ植民地着、十四

十五兩日植民地内を視察し十六

日夜聖市へ歸着、十八日ルス驛

はバウルー市長市會議長及び全

事官邸に赴いた、十九日はバウ

ルー市内を見物し午後一時五分

リヌスに向つた途中チビリサ、

ラクル・ミユーレ、グフラン

タ・ペナ等に於て在留同

胞より盛んなる歓迎をうけ全午

後六時リヌス着、市長郡長其他

土地有志及び在住同胞約三百名

の出迎をうけセントラルホテル

に入つたが此光景は其感動活動寫

眞に撮られた、全夜は市長より

晚餐の饗應をうけ互に歓談書き

ざらしめた(福岡特派員發)

日本人會と稱することに決定しきるも約二万五千名に達するたこれには赤松總領事よりの懇

トクなお聲掛りもあり目下準備

は着々進行中となるが同

志會の延長に相違なき點は別項

去十三日サントスを出發した有

吉大使一行はジユキヤ線各驛に

## 仇討地藏和讀

四

今自分が歩いて来た方の道から二つの影がもつれ乍ら此方に近づいて来た。二人は可怪しいと思つたが、會つて見れば解る事だと思つた。

近頃京之進は、殿の相手を仰せつかつて、夕刻でなくして下城しない事を知つてゐた。今日も夕刻下城する事を金井老人に聞てゐた。それで車を構へて、幸助を先に歸し、自分は此處で待ち受けたのだつた。

二つの影はだんだん近くへ來た。一人は確に京之進に違ひなかつた。今一人は、京之進の許が悪がつたが、今更致し方がなかつた。庄左衛門は柳の蔭に身を潜した。

『濠も柳も昔のまゝ、懐しいものだ』

それは京之進の聲だつた。

『こんな三ヶ月を見ながら、二人一緒に濠端を通るのは、何年振りだらう』

これが源三郎の聲だつた。

『十年にもなるかな?』

『いゝ月だね』

二人が話し乍ら立ち止つたらしくつた。庄左衛門は柳の蔭かのつた。庄左衛門である事をすぐ知つた。

『先生、月見で御座いますか』

京之進が云つた。庄左衛門は黙つてゐた。源三郎が注意深く二人の仲に這入つた。

『稻垣、御身に用がある』

『何か御用でも』

『私に?』

『さうぢや。先程から待ち受けたわ』

『何か御用でも』

Pharmacia Japoneza  
de Olavo & Queiroz  
ALVARES MACHADO

日本  
薬局  
日伯新聞  
取次  
種痘無料 每日  
アライシナルデ  
肥田 善術  
植民地  
調剤正確 麗價  
用命に應じます  
ブレジヨン

晝夜いつでも御

薦

かしては置かれぬ

」

か

として

は

生

れ

る

が

と

考

へた

。

京之進が取り合ひと思つたが、庄左衛門は口汚なく罵つた。

卑怯者、決闘が厭なら斬り捨て

る迄ぢや』

(相手を斬つても、自分が斬られても詰らぬ事だ。厭な親父に

京之進はかう思つた。出来る丈詫びて、相手の氣持を柔げ様と考へた。

京之進が取り合ひと思つたが、庄左衛門は口汚なく罵つた。

卑怯者、決闘が厭なら斬り捨て

る迄ぢや』

(相手を斬つても、自分が斬られても詰らぬ事だ。厭な親父に

京之進はかう思つた。出来る丈詫びて、相手の氣持を柔げ様と考へた。